第６学年　社会科　学習指導案

奈良教育大学付属小　池添梨花

１，単元名　　「戦争と人々のくらし」

２，単元の目標

〇15 年戦争当時の人々の暮らしについて、残っている資料や体験者の話を聞き被害と加害を学ぶ。
（知識及び技能）

〇戦争中や戦後の国民生活の変化を調べることで、どのような変化があったか考える。（思考・判断・表現）

〇15 年戦争で人々がうけた被害、終戦後に日本が平和な社会を目指したことについて調べたことをもとに、戦争と平和について自分なりの考えを持つ。（思考・判断・表現）

〇平和に向けて活動している人の話を聞いて、平和とはどういうことか自ら考えを持つことができる。
（主体的に学習に取り組み態度）

３，単元について

（１） 教材観

本単元では、戦争と人々のくらしを学習していく。日本がされた被害を学ぶだけではく、加害も学ぶ。原爆を落とされた、ひどいことをされたのだが、日本は戦争中東南アジアに領地を拡大し、植民地として他国を侵略してきた事実がある。その事実と向き合いながら戦争という本質に迫っていきたい。「日本が」と記載したが、日本軍に従うことしかできなかった日本のくらしにも焦点をあてながら多角的な視点で捉えさせていきたい。また立命館国際平和ミュージアムにいき、事実と向き合う。そして京都教育文化センターで「せこへい像」を作った方の平和の取り組みを知ることで、自分たちにできることはないか、何が平和というのか考えさせていきたい。誰もが平和への取り組みとして募金や像を作ることの取り組みを求めるのではなく、今生きている自分の置かれている状況と向き合い、自分がこれからどう生きるか考えるきっかけを与えたい。

（２） 児童観

本学級の児童は 5 月に広島へ修学旅行にいった。その際に中学生のときに被爆した中西さん梶本さんの話聞いた。実際に本人から話を聞く体験の貴重さに気がつき熱心に耳を傾けている様子があった。自分たちが今生きている世界では考えられない、死と隣り合わせであった当時の中学生の体験を聞いた。「今を大切に生きてください」という言葉が子どもたちの胸にも届いたことだろう。また証言者のことを聞きながらその様子を高校生が書いた絵を見せてもらった。

平和記念資料館では、途中で立ち止まってしまったり、最後まで見ることができなくなってしまったりした児童もいた。78 年前多くの人の命が一瞬にして亡くなってしまった事実を目のあたりにし、言葉にできない思いを持った子もいた。実際の物や、残された言葉、今の自分たちに向けられた言葉から「戦争は二度と繰り返してはいけないもの」という強い気持ちを感想で持っていた。

しかし、学習を進めていくと、戦争ということの被害だけではなく、加害を加えていった事実を知る。その事実と子どもたちはどう向き合っていくのだろうか。歴史は繰り返すと考えるとなぜ戦争という手段に出てしまったか学ぶことによって、本当の「平和」とは何か考えられるだろう。「戦争がないから日本は平和だと思います。」という言葉をヒロシマに行ったときは使っていたが、戦争がはじまるときに平和ではなくなるのではない。平和は少しずつ壊れていく。戦争もすぐに起きるのではなく、一歩ずつ近づいていく。そのような背景を残された事実と向き合わせて大きな枠組みで「戦争」「平和」ということを学んでいかせたい。

（３） 指導観

戦争のことになると、「もう二度と戦争はしてはいけないと思った」「今の平和を守っていきたい」と子どもたちは自分の言葉でかく。どんな事実と向き合ってもそれは変わらないわけではないと思う。戦争のことを学んでいくと「平和」とはなにか。自分の中で問いが生まれると思う。戦争がない＝日本は平和かと言えばそうではない部分もある。どうやって戦争が始まるかというと、小さな小さな差別からでも、自分の力を見せつけたいという思いからでも小さな火種が大きくなり、誰も止められなくなってしまう。そうなる前に自分たちの気持ちや思いをしっかりとわかっておく必要がある。

第 1 次世界大戦では、日本は最初関わっていなかったが、戦場がヨーロッパとなると、その戦いの中で中国へ攻めにいった。そして満州事変では、日本がしたことを棚にあげ中国がしたことにし、戦いを仕掛けていった。その後、アジア・太平洋戦争に突入し、アジアの国を植民地支配していった。現地の土地を奪ったり、現地の人を不当に殺害したりするなど日本軍がしたことは今でも許させることではない。そして今でも戦争が続いている国がある。そのことをどう捉えていけばいいか、戦争はダメだと思っていても終わらず、誰かによって始まってしまう。そうならないためには、民衆の力が不可欠である。誰かの意見に振り回されるのではなく、自分たちで自分たちの未来を考えられるように今の国の仕組みにしっかりと目をむけさせていく。

（４） ESD との関連

本学習で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

・責任性…戦争のことを語り継ぐバトンを自分たちの代で終わらせてはいけない
・多様性…住んでいた地域・人によって戦争の捉え方が違う
・相互性…日本国憲法へのつながり

本学習を通して育てたい ESD の資質・能力

・多面的・総合的に考える力

「戦争」という言葉には日本の被害が大きく印象づけられていると思う。しかし被害だけではなく加害もあったことを丁寧に説明しなければならない。どの国が良くてどの国が悪かったという良し悪しを判断するものでもないし、この時こうだったらと仮定しても戦争をなかったことにすることはできない。「戦争」という行為で当時の人たちの暮らしに、また長年にわたってどのような影響を与えていたのか考えていきたい。

本学習を通して育てたい ESD の価値観

・人権・文化を尊重する

「自分たち」という言葉をつくってしまうと、「自分たち」に入らない、入れなかったものを排除する考え方が高まっていく。そうすることによって「自分たち」という枠を一層強め連帯感を生もうとする。戦争中はそのことがとても強まった。戦争が良くて、戦争に反対する人たちは悪とされ、自国へも他国への取り返しのつかない過ちを重ねた。そのようなことが二度怒らないように人権・文化を尊重する力は不可欠である。それは日本だけに留まらず、世界にも視野を広げることのできることだ。

達成が期待される SDGs

1　貧困の撲滅
5　ジェンダーと平等
10　不平等解消
16　平和と公正

４，単元の評価規準

（ア）知識及び技能	（イ）思考力・判断力・表現力	（ウ）主体的に学習に取り組む態度
① 15年戦争の資料などから当時の様子を読み取っている。 ② 1930 年から 1945 年にかけて日本の国内であったことについてたくさんの情報から総合的に考えている。	① 戦争中や戦後の人々の生活について自分自身と関連付けて考え、戦争と平和についての自分の考えを明らかにしている。 ② 自分が学んできたことを伝えられるようにしている。	① 15 年戦争の人々の生活について関心を持ち自ら調べようとしている。 ② 立命館国際平和ミュージアムで自分が気になったことについてさらに考えを深め、行動に移そうとしている。

５，単元の指導計画（全 30 時間）

学習活動	学習への支援	評価
1　日清日露戦争の加害・被害を知る ・他国の争いに手を出したことについてどう思うか考える。 ・下関条約後清と日本の関係を知る。 ・三国干渉後の日露戦争についてどう思うか考える。 ・ポーツマス条約後の日本とロシアの関係を知る。 ・与謝野晶子や大月桂月の非戦論や主戦論について考える。 ・製糸工場で働く女性工員の一日を知る。 ・変化していく日本の領土を比べる ・選挙制度の変化や選挙活動の変化を知る。 ・明治時代に活躍した人々を調べる。	・日清戦争も日露戦争も最初から日本と清、日本とロシアの戦いでなかったことを考えさせる。 ・戦争の後の条約を日本、中国、ロシア、朝鮮の人たちがどう感じているか考えさせる。 ・日露戦争で日本は勝利したといえるのか考えさせる。 ・日本の国内の様子や言葉から戦争に対してどのような思いを持っていたか考えさせる。またなぜ非戦論や主戦論という考えが出てきたのかその背景を考えさせる。 ・韓国併合によって韓国で何が行われていたか事実から考えさせる。 ・多くの人の意見を取り入れて政治を進めていこうとした当時のことを考えさせる。	（ア）① （ア）②
2　第１次世界大戦のこと、満州事変から日中戦争のことを知る ・墓石を知る ・戦いの様子を調べる ・第１次世界大戦にどう関わっていったかを話し合う ・515 事件 226 事件を知る	・なぜルソン島で亡くなった人がいたか考える。 ・1929 年の世界的な大不景気が起こったと時に日本がどのように対応しようとしたか考える。 ・日本が戦争へと舵を進めていった経緯を考える。 ・1931 年の南満州鉄道の爆破を中国のせいにしたことついて考える。	（イ）①
3　第２次世界大戦　アジア太平洋戦争のことを知る ・1938 年国家総動員法 1939 年日独伊三国同盟	・黒山一郎さんの墓石をみて戦争標語を考えさせる。 ・黒山さんが生きた時代はどんな時代だった	（ア）① （ア）②

1941 年真珠湾攻撃について話し合い。 ・1942 年日本の本土空襲がどこに行われたか知る。 ・黒山一郎さんの生きた時代について知る。 ・沖縄で起こったことについて調べる。 ・学童疎開について映像などから考えを深める。	か考えさせる。 ・本土空襲は全国各地で行われていたことについて当時の生活を考えさせる。 ・日本で働く人が中国や朝鮮から来た人だということを考えさせる。 ・沖縄にアメリカ兵が上陸したことについて考えさせる。死者数の多さの原因を考えさせる。 ・子どもが親と離れて生活しなければいけなかったことについてなかまと共有し自分の経験と結び付けて考えさせる。	
4　戦後日本がどのような国を作ろうとしたかについて考える① ・ポツダム宣言受諾、日本の無条件降伏について調べる。 ・占領された日本に GHQ がきたことについて知る。	・終戦と捉えるか敗戦と捉えるか考えさせる。 ・本州、北海道、九州、四国が日本国の主権があることを考えさせる。 ・戦争孤児や残留孤児について考える ・アメリカ軍の上陸をどう思ったか考えさせる。	（ウ）①
5 立命館国際平和ミュージアムにいき、戦争と平和について考える。 ・実際の資料や言葉などから多角的に戦争について捉える。	・自分が今戦争をどのように捉えているか考えさせる。どう他の学年に伝えていくのか考えさせる。	（イ）② （ウ）②
6　戦後日本がどのような国を作ろうとしたかについて考える② ・公布された憲法について話し合う。 ・冷戦について知る。 ・朝鮮戦争について知る。 ・サンフランシスコ講和条約を 48 か国と結んだことについて知る。 ・日米安全保障条約について話し合う。 ・高度経済成長について知る。 ・沖縄問題について調べ、自分の意見をもつ。 ・イスラエル・パレスチナ・北方領土・台湾・韓国・北朝鮮問題について知る。	・憲法を守らなければいけないのは誰か考える。 ・東アジアでソビエトの権力が広がってきていることについて考える。 ・公害病などが各地で起こっているほど経済成長をしたが、健康被害も出たことを知る。 ・基地を現状維持するか、そうしないか様々な意見があることをしる。 ・基地の様子を記録している人の記録から起こっていることについて考える。 ・今でも戦争の爪痕が各地で残っていることを知る。 ・戦争が終わったらすぐに平和になるかといえばそうではないことを知る。	（ウ）① （ア）②
7　平和への思いを深め、1 人 1 人が社会をつくる担い手であることに気づき、なかまと協力して	・平和とは何か、平和の反対とは何かを考え、権利のことを学ばせる。権利が自分として守ら	（イ）②

行動する。	れているのか、世界では守られているのか考えさせる。 ・たてわりグループのメンバーにどのように伝えると、自分が願った平和に近づいていくのか考えさせる。	

６，成果と課題

ヒロシマ修学旅行では、次のように書いた子どもがいた。

平和のことを考えたに二日間　Ｎくん

広島について最初に被服支廠を見に行った。被服支廠の窓は頑丈そうだったのに、曲がっていた。自分はそれを見て、爆風がどれだけ強かったかがわかった。次に中西さんのお話を聞くために相生旅館に行く途中川が見えて、本当にこの川に大量の人が死んでたのかなと思った。なぜなら人がたくさん死んでいたのに、それがなかったかのように川がきれいだったからだ。相生に着いて中西さんの話を聞いた。中西さんは一五歳の時に被爆したと言っていた。普通自分なら友だちの顔が真っ赤で死んでいたら怖くて、何もできないと思った。中西さんは運がよく助かったらしい。家のほとんどが木でできていたから家の中で死んでしまった人もいたと言っていた。中西さんは家に帰ると家族は全員無事だったという。原爆が落ちた後は差別がおこった。それは他の人が全員亡くなったのにそこにいた人だけが助かったからで、自分は生き残った人は悪くないのに、なぜ差別するのかが自分にはわからなかった。次に平和記念資料館にいった。そこには、戦争の事実がたくさん書いてあった。爆風で折れた鉄があったり、焼けたお弁当をあったり、本にあったしんちゃんの三輪車があった。戦争中にお母さんが送った手紙には「〇〇ちゃん。ごめんね。サヨウナラ」と書いていた。自分はその瞬間涙が出てきた。今まで当たり前にいたお母さんから「サヨウナラ」という手紙がきたらその子はどう思ったのだろう。自分がその子だったら「えっ」と思う。お母さんそんな言葉言わないでと思う。次に、像などを見に行った。像には戦争に対する思いが書かれていた。

二日目には梶本さんのお話を聞いた。梶本さんは一四歳で被爆して、偶然、お父さんと出会って、爆心地から離れていたから無傷だったと言っていた。ただお父さんは放射線で血を吐いて死んでしまったらしい。最後に梶本さんが家族や下の学年の子に伝えてと言っていたので、伝えようと思いました。

まず、最初に戦争をする種をつくっちゃだめだし、原爆（リトルボーイ）を作っちゃだめだと思いました。戦争は絶対に繰り返したらダメだと思いました。

被爆者の中西さん、梶本さんから話を聞きくことや、平和記念公園を歩き残されたものを見ていくことを通して考えている様子があった。広島の原爆資料館では、途中から進めなくなってしまう子もいた。今の状況と 78 年前の様子を比べて信じられないと思っている子もいた。戦争のことを学ぶことで「戦争はいけない」「ロシアとウクライナの戦争はやめてほしい」などと言葉にする子たちが多かった。その子たちと一緒に歴史学習で戦争のことを学んでいくと、子どもたちの意見は変化した。

・なぜ日本は他国を攻めに行くのか？

・日本ってバカやん

・いみわからん。そんなことしたら仕返しされて当然。

第 1 次世界大戦や第 2 次世界大戦で日本が何をしたと思うかと問うと、「遠い国のことだから困っている人を助けた」「武器を売って戦争を支援した」とあまり関わっていなかったと思っていたが「他国へ侵略」したことを知ると、衝撃を受けている様子だった。そして、日本軍は頑張っていて、市民は配給が少なく子どもも労働さえられて「可哀そう」という感想を持っていた。しかし日本軍の兵士たちがどのように戦っていたか知った時には、

兵士たちも満足にご飯をもらえないなど市民だけが苦しかったわけではないことを知る。その事実を知ると、誰のための戦いなのか、戦いが始まることによって巻き込まれた人がいたことを理解していった。当初は、「日本がバカ」などという言葉で批評家みたいに事実を突き放して遠く考えてしまう子もいたが、なぜそのようなことが起きてしまったかなかまの言葉を聞きながら考えている様子があった。戦争中のことをどう思っているか、少しずつ共有していった。

・歴史から学ぶ　Ｋくん

今社会では歴史を学んでいます。自分は戦時中の人々のくらしについて考えました。位が上で日本のトップになっている人たちが戦争について決めます。でも戦争をすることによって人々の暮らしはどんどん悪くなってしまったと思いました。トップの人たちは自分自身が戦争に行っていないからその苦しさがわからないのだと思う。そうすることによって新たに戦争にいかないといけない人が出る。その家族は悲しむ。戦争はかけがえのない日常の１つ１つの幸せを奪っていてしまうと思った。韓国併合についても学びました。朝鮮は日本に領地を取られ、日本語のみの生活になってしまいました。名前も日本式にしないといけません。日本人が朝鮮（韓国）式にすると一緒です。日本はどんな思いでこのような命令をだしたのが不思議だけど当時はどれだけ戦争で勝てるかを第一に考えていました。これからの授業でも歴史を続けていくけど当時の人の気持ちになって考えていきたいです。

歴史を学んでいくと日本によって加害を与えられ、日本と同じように苦しんだ人たちのことを知る。そしてその中で立命館国際平和ミュージアムに一緒にいった。立命館国際平和ミュージアムでは、何を平和というか問いかけられていく場面がたくさんあった。子どもたちが「平和ってなに？と問いかけられるほうがわからなくなるからしんどい」と言っている子もいた。日本がしてきた事実と向き合い、近づいていったように見えた平和から遠ざかっているようにも見えた。でもそれでいいのだと思う。少しの情報でわかったと思い込むより、考えを深めることのできる題材に出会わせたい。戦争の被害は今でもなくなったわけではないのでその事実とどのように向き合っていくことができるかが大切になってくる。自分は関係がないと一線を引くのではなく、どのような考えを持ち続けることがこれからの学習につながるか考えさせていった。

・上がっては下がる平和　Ｉくん

昨日、社会見学に京都へ行きました。京都では主に「日本の戦争」と「日本の復活」を学びました。最初に「立命館国際平和ミュージアム」には日本の受けた被害だけではなく、日本が他国にしたことに関しても展示されていたのが印象に残っています。社会で習ってはいたけど改めて見てみると、台湾の缶づめに日本語が混ざっていたり、韓国の授業で本当に日本語が黒板に書かれていたりと、日本がどれだけ他国に影響を及ぼしているかがわかりました。もちろん、日本もたくさんの被害を受けていました。被害だけではないけど京都が原子爆弾の第一目標になっていたことに驚きました。当時は東京や大阪に軍事力が高かったため原子爆弾の目標になっていたそうです。

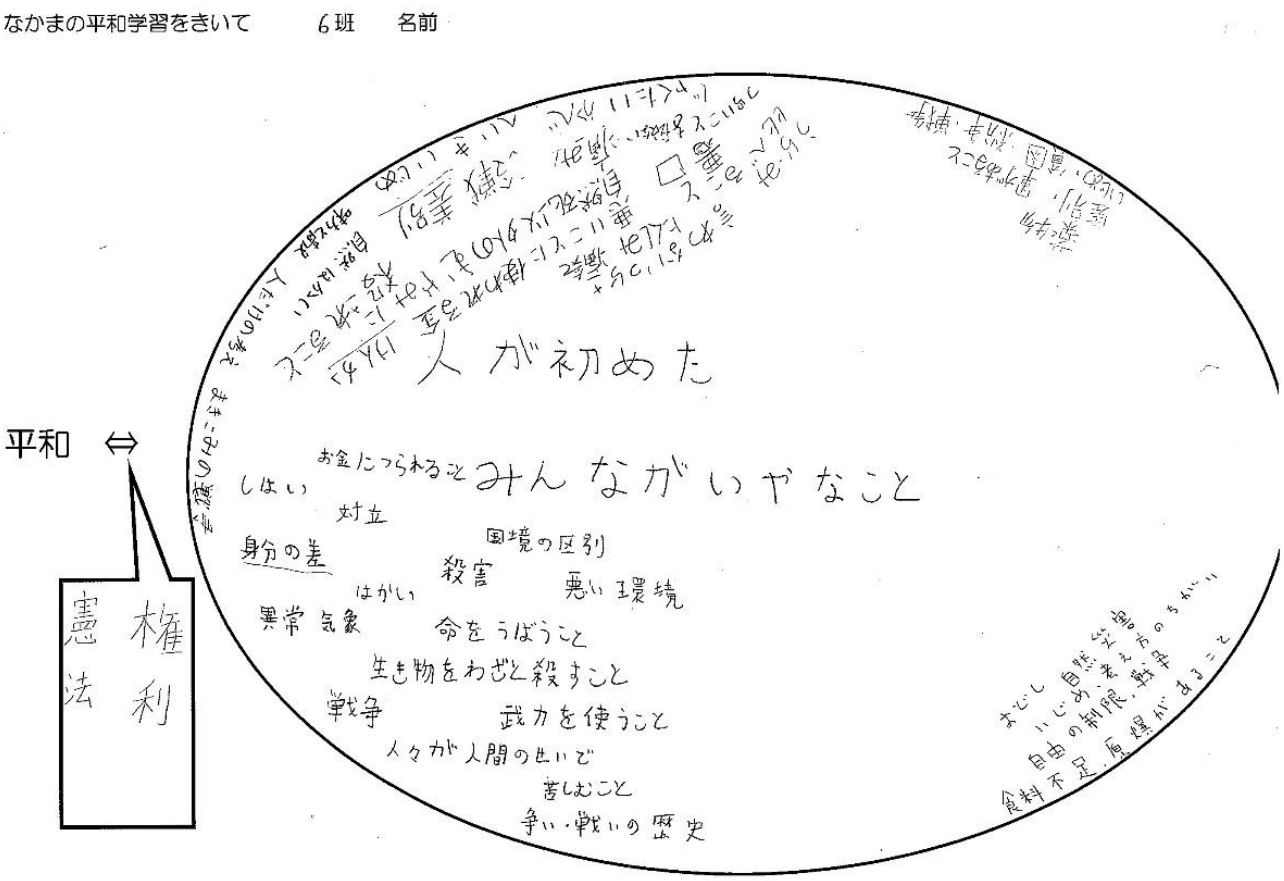
次に「京都教育文化センター」に行きました。そこで秋山さんの話を聞いて世界の子ども平和像のことをさらに知れました。戦争で被害を受けても、人々の平和な世の中にしようとする思いが伝わってきました。色々な地域でたくさんの団結で平和に近づいているんだなぁと思いました。そんな中、ロシア VS ウクライナやイスラエル VS パレスチナなど 15 年戦争を経て、改心し、平和の勢いがあがっていたのに、戦争がはじまり、平和が下がる。一体人間は何回戦争したら、平和な世界にできるのだろう？そもそも戦争をしているうちは絶対平和にならない。殺し合いではなく、話し合いで解決したい。

Ｉ君は、ヒロシマにいったときには、「戦争はいけない」「戦争は止めてほしい」との声をあげていた。しかし

歴史学習を続けていくと、戦争をやめてほしいと思っても戦争がはじまったしまったことや、ロシアとウクライナの戦争をやめてほしいと声をあげても戦争がなくならないことがわかってくる。すると、平和を願う声を挙げることがまるで無意味のように思えてくるかもしれない。子どもたちは歴史学習で「自分たちの声の価値」を確認している。戦争というのが生活に近いように思えるが、実感して感じられない。

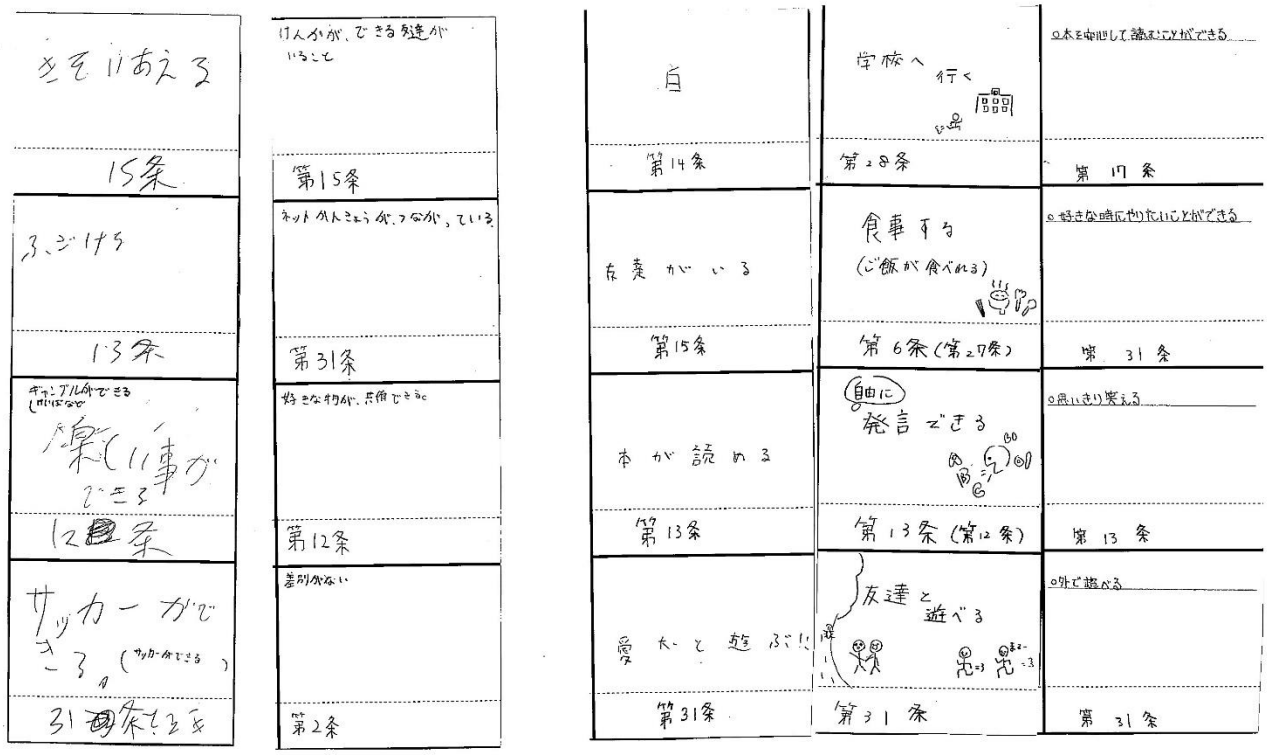
ヒロシマへいき、被爆者の話を聞き、戦争を学び、平和への活動をしている人から話を聞いて学んだ。これから子どもたちは学んだことをどのように発信していくのだろうか。その発信のさせ方が大切になる。平和の歌を作ればいいのか、誰かに話したらいいのか、像を作ればいいのか、その手段はたくさんある。どれもさせるのではなく、この子たちだからこそ向き合えるような内容、または自分からは向き合っていけないだろう内容はなにか考えたときに、権利を取り上げた。平和と平和ではないその間を守るために「子どもの権利条約」が作られたことを確認し、その中身が守られていることで、自分たちが平和と思えるようになってきていること、「自分たちの声の価値」を確認した。身近にあり、誰でも持っているものだが、権利というものはわかりにくい。権利を知り、自分たちの平和を深めいけている子たちが自分たちにできることを考えさせ、行動に移させていった。

そのためにまずは平和の反対であることを考えた。戦争だけではない平和についてたくさんのことを書いていた。



そして次に平和を考えた。平和と一言で言っても本人によって感じ方は様々である。だからこそ、自分が考えられる平和を深めていった。その後子どもの権利条約を知ったあとに自分の平和がどんな子どもの権利で守られているか確認した。

平和な世界って？なぜその平和を感じられるのだろうか？　４　班　名前



自分たちが感じている平和は権利が守られているからこそ感じることができることであることに気が付いているようだった。そのことを自信をもって１から５年生に伝えたいといっていた。

平和を伝え、たてわりグループのメンバーにどうなってほしいか

- 平和もその反対も身近にあるということを知ってほしい。自分なりの平和の意味を持ってほしい。Ｉくん
- 自分たちの平和な思いを大切にして、それが実現できるためには何をすればよいかはこれからも考えていってほしい。Ｋさん
- 戦争は怖い、平和を大切で終わらないでほしい。どうだから平和か自分はどんな時が平和なのかと向き合うようになってほしい。Ｙさん
- 行動する前にしっかりと考えて相手を傷つけないようにしてほしい。平和の反対は戦争だけではない。平和にするには自分たちも行動して行かないといけない。自分に自信を持って毎日が幸せなんだと実感して欲しい。Ｓさん
- 身近なところに平和があって、それがいつか壊れてしまうかもしれないということを分かってほしい。Ｈくん
- 自分たちは幸せだがまだ平和になっていないことを知ってもらいたい。平和とは何か考えてほしい。平和の思いを深めて欲しい。Ａくん
- 子供には権利があることを知り、社会に意見をいえる権利があるということを分かってほしい。一から六年生が自分も含め、今こんな話ができることや毎日学校に行けること勉強できることがすべて平和ということを知ってもらいたい。この平和が世界で守られていないことを知り。自分なりに世界がこの平和を守れるように出来ることを考えてほしい。Ｍさん
- 今起きていることや過去にあったことを見て見ぬふりをするなどのではなく、自分から知ろうとしたり、願ったり、行動を始めるようになってほしい。Ｋくん
- 一つ一つのことに感謝を伝えて、どんなことでもほかの人と違うところも自分で認めてほかの人ではなく自分で考えて自分の意見を伝え欲しい。あやか

権利とは…？詳しく言うと

- 自分や他の人が守らないといけない平和と平等なもの。Ａさん
- 誰もが持っていて自分を守るため友達などと暮らすためにあるもの。Ｋくん
- 私たちを守ってくれる決まり安心に過ごせる。Ｔくん
- 自分たちにも守られたりたくさんの自由があるということ。Ｍさん
- 平和とみんなを守るためにあるもの、Ｈくん
- 自分を守ってくれたり助けてくれるルールのこと、Ｈさん
- 生きるために必要な物ないと何も守られない。Ｙさん

たてわりグループ集会では、次のような言葉を作って伝えた。

1月30日　にじグループ集会の話し合いの内容

1

これまでの学んできたこと① 夏休み 和太鼓習 のこと	わかりやすく伝える工夫
おいしいもの→前菜を話題でチビチビ食べる 食べられない日→のらねこを飼って食べたり、ザリガニ・バッタ 一番最高な夜ごはん→ネズミ入りスープ・シチュー 子供がくつみがきする 栄養があまりとれなくて水ぶくれ(できもの)ができる お風呂に入るとすごく痛い。	言葉を簡単に…！

これまでの学んできたこと② 立命館大学 のこと	わかりやすく伝える工夫
立命館大学→平和のため作られる 日本の植民地について。 ラジオ、馬・犬、当たり前、差別 行って見て感想。	

身近な平和を考えることはこれまでの話とどうつながるのか？

今ではありえないこと
昔と今の日常を比べる

考えることで自分たちのグループは

平和にするためには自分達も行動しないといけない
自分の平和の思いをもってる

2

身近な平和
1年生
2年生
3年生
4年生
5年生
6年生

それを世界のみんなが守っていくためにはどうしたらいいか出し合う、話し合う

3

権利の紹介
権利をわかりやすく言うと…　守ってくれるきまり、ルール　世界で実じしてくらせる

例えば　6　条

自分が大切だと思うところ
『自分は生きる価値なんてないんだ』って言う人(思ってる)にこの権利を教えたい。
生きないと何もできない
この権利がなければ、『お前は生きる価値なんてない』(いい)と理由だけで子供が殺されてほう。

例えば　31　条

自分が大切だと思うところ
休んだり遊ぶことが子供にとって大切なものだと思う。
休むことで体調を管理する。ストレスをたまりにくくなっている。
遊ぶことで、コミニケーションをとり、ストレスがいしょうにつながると思う。

例えば　38　条

自分が大切だと思うところ
戦争に子供がまきこまれるのはおかしい。
国と国との できることはすべてしなければなりませんっていう所が大切。

平和を伝えるにじグループ集会を終えて、どんな姿になってほしいか

- 行動する前にしっかりと考えて相手をきずつけないようにしてほしい
- 平和の反対は戦争だけではない　平和にするには自分達も行動しないといけない
- 自分に自信をもって、毎日が幸せなんだと実感してほしい

伝え終わって

・グループを振り返って　Ｉくん

今回のにじグループを振り返って伝えたかったことも伝えられたし、何よりグループで一人一人が思う平和を伝え合えたのが良かったと思います。最初に今までの振り返りも兼ねて日本がどう戦争に関わってきたかを話しました。結構忘れかけの子もいて、この振り返り話は自分でもナイスだったと思います。そこからどうやって平和を保つか、どうしたら平和にできるかを話し合いました。条約は大きめのルール、権利は人ひとりずつを守るルールとした二つの言葉を区別して説明しました。それから第２条第 31 条などの短すぎることでさえ守られていることがわかる権利も解説しました。そして個人的にここが超がつくほど重要！だと思ったのが、どんな決まりがあれば平和になるのかの話し合いです。一から三年生はふざけるのかなぁと思いながら聞いてみると「ゴジラに平和じゃない人を驚かしてもらう」や「戦争するときはじゃんけんで決着を付ける」などふざけているけど、確かに平和に近づけることなんです。だから平和はなんとなくでも伝わったのかなと思います。終わった後に本当に思っていたことを真面目に言ってくれた子もいたし、この会を通してグループの子は、自分なりの平和への考えができたと思うし、自分も一から五年生の言ってくれたことを聞いて、さらに平和を深めていきたいなと思いました。

・平和　Ｈさん

私は、国際平和ミュージアムのこと、夏休み平和学習のことについて話しました。ノートに書いたことをそのまま読むのではなく、わかりやすいように話しました。なので一から五年生もうなずきながら話を聞いてくれて質問もしてくれました。事実だけを言うだけではなく、自分の思ったことなども言うことでよりわかりやすく伝わったと思います。

夏休み平和学習のことについては、広島と比べたりしながら伝えました。権利の紹介をするときは自分の大切だと思う権利を伝えると五年生のりさちゃんが「みんな権利って何か知っているかな？もっとみんなが知ったら世界は平和になると思う」と言いました。私は確かに世界中のみんなが権利とは何か権利を守ると世界中が平和に一歩近づけるものだと気づけば、人間が人間を殺す争いなんてなくなるんじゃないかなと思います。

　次に一から六年生が思う身近な平和を考えて書きました。二年生以外はすらすら書いていたけど、二年生は書き始めずに困っていました。自分は身近な平和と言われたらすぐに思いつくけど、身近な平和と聞いただけではいつも通りのことが平和とは思わない人もいるんじゃないかなと思います。もちろん今戦争している人、昔戦争をした人、戦争を見た人、聞いた人は今この日本は平和と思うと思います。でも戦争を理解していなかったら、今が平和とは思わない人もいる。だから平和だけを伝え続けるのではなく「平和ではないこと」や「戦争」のことについて伝え続けるのではないかと思います。話し合いが終わり、私のグループは自分なりの考えを持ち、今これが平和と言うことをわかってくれたと思います。

　教室に帰ってくると、身近な平和で「好きな人がいること」「にじが見られること」「今ここにいられること」などを１から５年生があげてくれたと話した。難しい内容の時は手助けしながら、自分たちが持っている権利や、平和と平和ではないということを感じさせたようだった。「平和にするためには？」と問いかけると、「戦争しない」だけでははなく「話し合い」をすること「世界が１つに近づけたら」という意見も出たようだった。

　子どもたちが子どもたちの言葉で語るからこそ、深め合うことができた内容になったと思う。平和というものが漠然としていて何かわからないからこそ、子どもたちが身近に感じられることを大切にしながら、これから先どう生きていくのか考える材料にしてほしい。自分で考えることも大切だが、自分の考えを持ちどのようにわかりやすく伝え、なかまになっていけるのか考えさせることができたと感じる。

小学６年

現在の学年終了時に目指す姿

一人一人が社会をつくる担い手であることに気付くとともに、多様な人たちと協働してよりよい社会のための行動を自ら起こすことができる。

社会科「立命館平和ミュージアム見学」

戦争の被害だけではなく、加害も一緒に学ぶ。戦争が終わった後平和に向けて子どもが行動したことについて自分事として考えさせる

誰かに任せきりにするのではなく、私たち一人一人が平和な社会づくりに関わっていかなければ。

1人での考え方では平和を深めていくことはできない。平和とはどういうことか。

世界がどうすればもっとよくなるか真剣に考えていきたい。

社会「戦争と人々のくらし」

○ESD の資質・能力

「戦争」という言葉には日本の被害が大きく印象づけられているが被害だけではなく加害もあったこと。「戦争」という行為で当時の人たちの暮らしに、また長きにわたってどのような影響を与えていたのか考えていきたい。

○ESD の価値観

戦争が良くて、戦争に反対する人たちは悪とされ、自国へも他国への取り返しのつかない過ちを重ねた。そのようなことが二度怒らないように人権・文化を尊重する力は不可欠である。それは日本だけに留まらず、世界にも視野を広げさせる。

学級の時間「平和の思いの読み合い」

原爆資料館や立命館平和ミュージアムにいき自分の思いをもつことや、仲間の思いに出会うことを通して平和というものについて考える。自分の感じた思いとなかまの感じた思いを出し合うことで自分の思いをさらに深めていく。

国語科「平和のとりでを築く」(大牟田稔)

原爆ドームを世界遺産にしようという動きを作った背景や当時の様子から、平和のとりでを住民たちが主体的に行動したことが書かれている。児童一人一人がヒロシマに行く前にヒロシマであったこと、今の終わったことではないことを確かめたい。

社会科「戦争までの様子」

校区にある奈良教育大学は、元陸軍第 38 連隊があった場所であり、いくつか遺構が残っている。空襲の被害が少なかった奈良においても、戦争は人々のくらしに大きくのしかかり、自由とは無縁の持続不可能な社会であったことを理解する。

まずは平和な世の中でないと、何も始まらない。

平和な世界のために、私たち一人一人が考えを持たないと

修学旅行(広島を題材にした平和学習)

戦争や原爆について、事前学習・現地学習・事後学習を通して正しく理解するとともに、戦争のない世の中をつくるためには一人一人が平和について自分事として考えたり、学んだことや考えたことを伝えたりする努力が大切であること実感する。